

別府溝部学園短期大学自己点検・評価について —平成23年度—

大石 博 嗣

The Report of the 2011 Self-Study and Evaluation at Beppu Mizobe Gakuen College

Hiroshi Oishi

はじめに

現在、大学は全入時代を迎え、幅の広い学生層を受け入れるようになっていく。向学心・向上心が強く、自らの可能性の発掘、伸長をめざして入学してくる者が多数を占めてはいるが、一部に目的意識も定かでなく、とりあえず、何となく、入学してきている者が存在するのも事実である。

このような中、大学に問われているのが、「教育の質」であり、高等教育機関としての質を確保しつつ、多様な学生のニーズに応え得る教育を創造し、提供しなければならない。特に、教育活動の中核となる授業については、教員が最も意を用いなければならない部分である。中央教育審議会でも、教員が授業内容・方法を改善し、向上させることの必要性を強く指摘しており、学生の学力や意識、受講態度、理解力等を的確に把握して適切な授業を展開しなければならないことはいままでもない。そして、何事も授業を実施した場合、その過程や結果について分析、評価することが肝要である。いわゆる、PDCAの取り組みの強化を図らなければならない。

授業の評価、分析は、従来、教員の自主的・主体的な活動にゆだねられてきたが、評価の高い客観性や適格性を求め、教員の自己評価に加え学生による評価も重視しなければならない。本学では、平成5年度から委員会を発足させて、学内の自己点検・評価について検討を重ねてきた。12年度からは、全教科を対象に授業評価が開始されて現在に至っており、その結果を基に授業の改善・工夫の努力が行われ、学生生活をより有意義なものにしている。「自立・自活できる人材の育成」をめざし、各授業担当

者が学生の琴線に触れるべく常に創意工夫を凝らした授業創造に努めている。以下、学生による授業評価の結果について検討を加える。

1. 調査内容及び手続き

平成23年度の「学生による授業評価」は、「デジタルキャンパス」を利用したシステムでの評価法により、下記の10項目の評価項目について実施した(表1)。

表1 学生による点検項目

- | | |
|-----|-------------------|
| Q1 | この授業はわかりやすかった |
| Q2 | 学習内容に興味や関心が持てた |
| Q3 | 学習内容の分量は適切だった |
| Q4 | 教員の教え方に工夫が感じられた |
| Q5 | 教員は熱心に教えていた |
| Q6 | 授業中どの学生にも公平に接していた |
| Q7 | いつも集中して聴けた |
| Q8 | 私語をつつしんだ |
| Q9 | 遅刻、欠席がないよう心がけた |
| Q10 | 意欲的に取り組んだ |

教員による自己評価も従来通り下記の10項目で行った(表2)。

表2 教員による自己評価

Q1	学生は授業を理解した
Q2	授業の事前準備は、十分おこなった
Q3	学生の興味・関心を喚起するように心がけた
Q4	各種教材（視聴覚機器・教科書等）を有効に活用した
Q5	授業の開始・終了時刻を守った
Q6	授業中どの学生にも公平に接した
Q7	出欠確認を適切におこなった
Q8	授業目的を達成した
Q9	授業要項（シラバス）の記載内容は現状のままでよい
Q10	学生のことが理解できた

2. 平成23年度授業評価

【全体評価】（含留学生）

表1の評価項目を、次の5段階で評価した

1	とてもそう思う	肯定的評価
2	だいたいそう思う	
3	どちらとも言えない	
4	あまりそう思わない	否定的評価
5	まったくそう思わない	

・前期

表3から、学生の授業評価は、すべての質問項目で「とてもそう思う」が昨年度同様に50%を超え、特に、Q9（遅刻、欠席がないよう心がけた）は74%で積極的に授業に参加しようとする姿勢が伺える。Q7（いつも集中して聴けた）54%は多少注視しなければならないが、総じて、学生側の項目は高率であり、真面目に授業に取り組んでいる姿が伺える。

「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価レベルでは、Q1（この授業はわかりやすかった）・Q7の78%以外は、いずれも80%を超える高い数値を示しており、各学科とも、教員の授業運営及び学生に対する姿勢と学生の心構えが相互に触れあい、自己実現に向けた教育活動が適切に推進されていると考えられる。

教員は、日々、学生の実態を的確に把握し、学生のニーズに合った、そして、学生の将来を見据えた授業創造に積極的に取り組まなければならない。教員は、「授業で勝負する」と古くから言われてきた。大学は、「研究」を重要な活動分野としてきたが、近年は「教育」活動の重視が言われ始め、特に授業改善のためのFD活動の活発化が期待されている。本学内において、組織的、系統的な活動は表面だけでは見られないのは残念であるが、教員一人ひとりが、課題意識を持って努力していることが推測され、今後は点から面への拡充を期待したい。

表4から学科間の特徴を見てみると、昨年度、3学科（食1、幼2、介3）6項目あった肯定的評価90%台は、今年度、幼児教育学科1項目（Q5）、介護福祉学科2項目（Q5・Q9）の計3項目とやや減退している。内容は、幼児教育学科はQ7以外はすべて80%以上、介護福祉学科は全ての項目が80%以上の高評価となっており、大変好ましい姿である。反面、食物栄養学科はQ1が68%、Q4（教員は熱心に教えていた）が69%、70%台が4項目（Q2、Q3、Q6、Q7）で、ライフデザイン学科も、70%台が6項目（Q1、Q2、Q3、Q4、Q7、Q8）に及び、前記2学科に比して若干厳しい結果である。

否定的評価では、昨年度10%を超える項目はラ

表3 全体評価（前期）

	とても 思う	そう 思う	だいた いそう 思う	言えな い	どちら とも	思わな い	あま りそう 思わな い	ま ったく そう 思わな い	無回 答
Q1 この授業はわかりやすかった	55%	23%	11%	5%	4%	1%			
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	56%	24%	11%	4%	3%	1%			
Q3 学習内容の分量は適切だった	55%	25%	13%	4%	3%	1%			
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	58%	23%	11%	4%	3%	1%			
Q5 教員は熱心に教えていた	68%	20%	7%	2%	2%	1%			
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	65%	20%	9%	2%	2%	2%			
Q7 いつも集中して聴けた	54%	24%	13%	4%	3%	2%			
Q8 私語をつつしんだ	62%	20%	10%	4%	2%	1%			
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	74%	13%	8%	2%	2%	1%			
Q10 意欲的に取り組んだ	63%	21%	10%	3%	2%	1%			

表4 全体評価(前期・学科間比較)

	4 + 5 [肯定的評価]					3					1 + 2 [否定的評価]				
	ライフ	食物	幼教	介護	平均	ライフ	食物	幼教	介護	平均	ライフ	食物	幼教	介護	平均
Q 1	75%	68%	81%	83%	77%	14%	14%	11%	10%	12%	10%	17%	7%	7%	10%
Q 2	78%	71%	82%	85%	79%	13%	13%	13%	10%	12%	9%	15%	5%	5%	8%
Q 3	79%	71%	80%	81%	78%	14%	15%	13%	13%	14%	6%	13%	6%	5%	7%
Q 4	76%	69%	85%	86%	79%	15%	15%	10%	9%	12%	9%	15%	4%	4%	8%
Q 5	84%	82%	91%	90%	87%	11%	9%	6%	6%	8%	5%	8%	2%	2%	4%
Q 6	87%	78%	87%	84%	84%	9%	11%	9%	10%	10%	3%	9%	2%	5%	5%
Q 7	75%	75%	76%	82%	77%	17%	11%	16%	12%	14%	7%	13%	6%	5%	7%
Q 8	73%	81%	80%	86%	80%	17%	9%	12%	9%	12%	8%	8%	6%	4%	7%
Q 9	80%	87%	87%	91%	86%	14%	7%	9%	6%	9%	5%	6%	4%	2%	4%
Q 10	83%	80%	85%	86%	84%	12%	11%	12%	9%	11%	4%	8%	3%	4%	5%

イフデザイン総合学科2項目(Q1・8)は、今年度1項目(Q1)へと減少したが、食物栄養学科は、1項目(Q1)から5項目(Q1・2・3・4・7)へと大幅な増加である。食物栄養学科の内容は、Q1が17%、Q2(学習内容に興味や関心が持てた)が15%、Q3(学習内容の分量は適切であった)が13%、Q4が15%、Q7が13%である。全国的に指摘されている学力の低下に起因するものも大きいと思われが、大学は高等教育機関として、授業の難易度が上がることは必然であり、それをいかに分かりやすく教えるか、学生の実情を正しく理解するとともに、一人ひとりの学生を大切に、効率的・効果的な授業の管理、運営に努力を惜しんではならないと考える。教員が相互に連携を図りつつ、一人の落伍者もださない、魅力ある授業の創造、開かれた授業等々に向け叡智を結集することが重要である。

学生の授業への取り組む姿勢について、私語が多くてうるさい、集中力がなく長続きしない等現代学生気質の問題点の指摘もあるが、その背景の一つに授業への不満があることに心を配り、個に応じ、親身になった対応をすることを常に忘れてはならない。確かに、全体的には肯定的評価は高く、満足度の高い授業が提供されていると考えられるが、否定的評価の学生に対しても正当性・妥当性のある内容であれば十分検討して、期待に応え得る改善された授業を提供することが、大学の教育の基本に沿うことになる。

・後期

表5から、「とてもそう思う」評価では、Q9(遅刻、欠席がないよう心がけた)が前期74%から後期72%と低下した以外は、すべての項目で評価値を上昇させており、いずれも60%以上の高い評価となっている。肯定的評価では、いずれの項目も80%以上へと評価値を上昇させており、好ましい雰囲気の中で授業が維持されてきていることが思考される。教員は、常に授業改善に意を用い、意義ある授業の運営管理に努め、学生は充実した時間を過ごしているものと推察される。

否定的評価についても、いずれの項目も10%以下であり、前期に比して、現状維持が2項目(Q5・6)、残り8項目は数値を減少している。教員の熱心な指導態度に学生の共鳴度は一段と増し、活力ある授業が教員、学生双方の真摯な態度により維持され、前期よりも評価が上昇するのが大学の特色とするところであり、今年度もその姿が保持されたことは賞賛に値するものである。

表6から、肯定的評価に関して学科別に見ると、他学科に比して若干厳しい評価が出ていた食物栄養学科での大幅な改善の姿が見られる。後期では、すべての項目が70%以上に改善され、Q5(教員は熱心に教えていた)85%、Q6(授業中どの学生にも公平に接していた)83%、Q8(私語をつつしんだ)83%、Q9(遅刻、欠席がないよう心がけた)88%、Q10(意欲的に取り組んだ)82%と大台に乗せることができています。

一方、前期にかなり高い評価値を出していた介

護福祉学科は、わずかであるが評価値を減少させている。しかし、減少したとはいえ、Q3（学習内容の分量は適切であった）の79%が最低値であり、残りの項目はすべて80%台をキープしており、問題は少ないものと思われる。介護福祉学科同様、高い評価値を出していた幼児教育学科は、2項目（Q5・9）以外は更に評価値を上昇させており、殆どの項目が67%以上となり高く評価できる。

ライフデザイン総合学科では、80%台が前期4項目（Q1・2・4・8）から2項目（Q5・6）に減少するとともに、すべての項目で評価値を減少させており、4学科の中では一番厳しい結果となっていることは少々残念である。

否定的評価では、10%台が前期5項目存在した食物栄養学科が、1項目（Q1）へと大幅に減少させ、逆に、1項目のみであったライフデザイン総合学科が4項目（Q1・2・4・8）へと逆に大幅に増加させている。評価値を低下した項目については、客観的、多面的な分析と対策を講じられることを期待したい。

以上のことから、全体的には、今年度も学生の授業に対する満足度はかなり高いレベルで推移してきたものと思われる。幅の広い学生層に誠実に対面し、適切な授業の提供に意を用いた教員の努力の賜であろう。

この結果に胡座をくむことなく、教える立場の教員は、常に、自らの授業を冷静に見つめ、学生の実態に即したのになっているか、学習者を中

心に据えた授業になっているか等、シビアな自己評価・授業評価を行い、真摯な態度で授業改善に取り組むことが必要であろう。その際、個人として授業研究を行うことはもちろん重要であるが、学科やグループ等で組織的に研究活動を行い、PDCAの継続的取り組みが大切であると考えます。

以下、学科・学年ごとに考察を加えることにする。ただし、中国からの留学生については、学科の枠を取り払って学年単位でまとめて集計している。

表5 全体評価（後期）

	そう思う	そう思う	言えない	どちらとも	あまりそう	思わない	まったくそう	無回答
Q1 この授業はわかりやすかった	62%	20%	10%	3%	3%	1%		
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	63%	20%	11%	3%	3%	1%		
Q3 学習内容の分量は適切だった	61%	22%	11%	3%	2%	1%		
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	63%	20%	10%	3%	3%	1%		
Q5 教員は熱心に教えていた	69%	18%	8%	2%	2%	2%		
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	67%	19%	8%	2%	2%	2%		
Q7 いつも集中して聴けた	62%	21%	11%	2%	2%	2%		
Q8 私語をつつしんだ	65%	18%	10%	2%	2%	2%		
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	72%	15%	8%	2%	1%	1%		
Q10 意欲的に取り組んだ	68%	19%	10%	2%	1%	0%		

表6 全体評価（後期・学科間比較）

	4 + 5 [肯定的評価]					3					1 + 2 [否定的評価]				
	ライフ	食物	幼教	介護	平均	ライフ	食物	幼教	介護	平均	ライフ	食物	幼教	介護	平均
Q1	70%	75%	88%	80%	78%	17%	14%	8%	11%	12%	12%	10%	3%	7%	8%
Q2	72%	76%	89%	80%	79%	14%	15%	8%	11%	12%	12%	8%	2%	7%	7%
Q3	75%	76%	88%	79%	80%	17%	15%	9%	11%	13%	7%	7%	2%	9%	6%
Q4	71%	76%	88%	82%	79%	17%	14%	8%	10%	12%	10%	9%	2%	6%	7%
Q5	81%	85%	90%	85%	85%	13%	10%	6%	8%	9%	6%	5%	2%	6%	4%
Q6	86%	83%	89%	82%	85%	9%	10%	7%	9%	9%	3%	6%	2%	7%	4%
Q7	73%	78%	88%	80%	80%	19%	15%	8%	11%	13%	7%	6%	2%	7%	5%
Q8	72%	83%	87%	82%	81%	16%	11%	9%	12%	12%	11%	5%	1%	5%	5%
Q9	79%	88%	87%	87%	85%	14%	8%	9%	8%	10%	6%	4%	3%	4%	4%
Q10	78%	82%	91%	84%	84%	17%	14%	7%	9%	12%	5%	4%	2%	6%	4%

【学科別評価】

1. ライフデザイン総合学科1年

・前期

調査項目10項目の中で、「とてもそう思う」について、Q9（遅刻、欠席がないよう心がけた）は71%、Q6（授業中どの学生にも公平に接していた）とQ10（意欲的に取り組んだ）は65%の高率である。しかし、これら以外の7項目は、いずれも60%を割るというやや淋しい結果である。特に、Q1（この授業は分かりやすかった）47%、Q2（学習内容に興味や関心が持てた）48%、Q3（学習内容の分量は適切だった）49%は他学科と比べると低率であり、今回の結果を客観的に分析し、次年度に向けて改善策を講ずるべきであろう。

「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価では、Q6が86%、Q10が85%、Q5（教員は熱心に教えていた）が84%、Q9が81%とかなりの好結果であり、残りの項目もすべてが70%以上の評価で、全体的には評価できるものと思われる。

否定的評価（あまりそう思わない+まったくそう思わない）では、2項目（Q1・2）が10%台の数値を示し、問題点の一つであろう。ただ、前年度1年生は、5項目に及んでいたことを考えれば好ましい結果とも言える。Q1の13%、Q2（学習内容に興味や関心が持てた）の12%について

では、授業内容に起因するものである。学生の学力や意欲、関心等実態を客観的かつ多面的に捉え、分かりやすく、心を揺さぶる授業、やる気を喚起する授業の創造に教員相互が知恵を出し合わなければならない。学生自身も、受け身の姿勢でなく能動的に活動し、予習・復習の時間を十分確保し、自己実現をめざし、努力を惜しまない姿勢を確立しなければならない。

・後期

「とてもそう思う」では、Q9（遅刻、欠席がないよう心がけた）が68%であり、学生が授業に真面目に取り組んでいる姿勢が推察される。前期に引き続いての結果であり、好ましい姿である。しかし、前期71%からは数値を低下させていることは残念でもある。そして、残りの項目のほとんどが評価値を低下させており、40%台も前期3項目（Q1・2・3）から6項目（Q1・2・3・4・7・10）へと大幅に増加した厳しい結果となっている。特に、Q10は65%から49%へと大幅な変動を示しており、学習意欲の低下は様々な生活の分野に悪影響を与える危険性が大きく、原因究明について早急な取り組みを期待したい。

「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価でも、前期はすべての項目が70%以上であったが、4項目（Q1・2・3・7）が70%を割る結果であり、好ましくない流れが見られる。本学は、前期よりは後期の方が好ましい評価結果がでることがウリの一つであり、大変残念である。

否定的評価（あまりそう思わない+まったくそう思わない）に関しては、Q6が4%と最も低い数値で、残りはすべて5%を超えている。特に、10%を超える項目が、前期の2項目（Q1・2）から4項目（Q1・2・3・4）へと倍増しているのは看過できない。内容的には、教員側に関わる項目がすべてであり、教材の精選をはじめ、展開の工夫等授業改善の取り組みを精力的に行わなければならない。学生の授業に対する姿勢は、いずれも5%程度の小さい評価値なのだから、教える側の教員の努力を期待したい。

表7-1 ライフデザイン総合学科1年（前期）

	とても そう 思う	そう だいた い思 う	言え ない も	思 わな い そ う	思 わな い そ う	無 回 答
Q1 この授業はわかりやすかった	47%	26%	13%	7%	6%	1%
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	48%	27%	14%	5%	5%	1%
Q3 学習内容の分量は適切だった	49%	30%	13%	5%	3%	0%
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	50%	25%	16%	6%	3%	0%
Q5 教員は熱心に教えていた	58%	26%	11%	3%	2%	0%
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	65%	21%	8%	3%	1%	1%
Q7 いつも集中して聴けた	50%	24%	18%	6%	1%	1%
Q8 私語をつつしんだ	55%	21%	16%	6%	2%	1%
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	71%	10%	13%	4%	0%	1%
Q10 意欲的に取り組んだ	65%	20%	12%	3%	0%	0%

表7-2 ライフデザイン総合学科1年(後期)

	とても 思う	だいたい 思う	言えない どちらとも	あまり 思わない そう	まったく 思わない	無 回答
Q1 この授業はわかりやすかった	40%	22%	21%	10%	6%	1%
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	42%	22%	19%	10%	6%	1%
Q3 学習内容の分量は適切だった	44%	26%	19%	6%	4%	1%
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	44%	20%	22%	9%	4%	2%
Q5 教員は熱心に教えていた	51%	26%	15%	5%	1%	1%
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	56%	28%	11%	2%	2%	1%
Q7 いつも集中して聴けた	42%	25%	24%	4%	2%	2%
Q8 私語をつつしんだ	52%	22%	18%	6%	2%	1%
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	68%	13%	15%	3%	2%	0%
Q10 意欲的に取り組んだ	49%	26%	21%	4%	1%	0%

2. ライフデザイン総合学科2年

・前期

調査項目10項目の中で、「とても思う」に關して70%以上を示した項目はゼロではあるが、Q6(授業中どの学生にも公平に接していた)64%、Q9(遅刻、欠席がないよう心がけた)は63%、Q5(教員は熱心に教えていた)は60%となっている。1年前と比べるとやや低下した内容であるが、まずまずの結果である。Q7(いつも集中して聴けた)49%、Q8(私語をつつしんだ)46%は、厳しい結果ではあるが、学生が冷静に自己評価したものと考えたい。

「だいたい思う」を含めた肯定的評価ではQ2(学習内容に興味や関心が持てた)の81%、Q5の83%、Q6の88%、Q10(意欲的に取り組んだ)の80%と、かなりの高い評価率となっている。その他の項目でも、肯定的評価ではいずれも70%台をキープしており、教員の熱心な指導態度に学生が的確に反応し、活力ある授業が展開されていることが推察される。

否定的評価(あまりそう思わない+まったくそう思わない)では、Q6が2%の最低値で、10%を超える項目は存在しない。しかし、Q4(教員の教え方に工夫が感じられた)の8%は授業に対する不満の現れとも考えられ、その結果がQ8の

9%やQ9とQ10の7%に現れていると考えられ、学生の授業に臨む姿勢に影響を与えているものであり、見過ごしてはならない。教員の熱心な指導態度は高く評価されているのだから、分かりやすい授業の工夫・改善に積極的に取り組み、魅力ある授業の創造に努めなければならない。ただ、1年前及び半年前の評価では、10%を超える項目が2項目も存在していたことを考えると、良い方向に向いているものと思う。

表8-1 ライフデザイン総合学科2年(前期)

	とても 思う	だいたい 思う	言えない どちらとも	あまり 思わない そう	まったく 思わない	無 回答
Q1 この授業はわかりやすかった	55%	23%	15%	4%	2%	0%
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	55%	26%	12%	6%	1%	1%
Q3 学習内容の分量は適切だった	55%	24%	16%	3%	2%	1%
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	54%	23%	13%	6%	2%	2%
Q5 教員は熱心に教えていた	60%	23%	10%	5%	1%	1%
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	64%	24%	9%	1%	1%	1%
Q7 いつも集中して聴けた	49%	28%	16%	4%	2%	1%
Q8 私語をつつしんだ	46%	24%	19%	6%	3%	2%
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	63%	16%	14%	4%	3%	1%
Q10 意欲的に取り組んだ	56%	24%	13%	4%	3%	0%

・後期

調査項目10項目の中で、「とても思う」に關して、Q5・6はいずれも63%で、まずまずの結果である。60%以上は、前期の3項目から2項目への後退であるが、逆に、50%未満は2項目から1項目へと好転している。前期から評価値が上昇したのは6項目(Q2・4・5・7・8・10)、低下したのは2項目(Q6・9)のみである。

「だいたい思う」を含めた肯定的評価では、80%を超えた項目は7項目(Q2・3・4・5・6・7・10)で、前期4項目からの大幅なアップである。特に高い項目は、Q6の91%、Q5の85%、Q2の84%で、最も低い評価値でもQ8の69%である。学生を引きつける授業の運営や、誠実で熱心な指導姿勢は学生に好印象を与えてお

り、全体的には好ましい状況で授業が運営されているものと思う。

否定的評価（あまりそう思わない＋まったくそう思わない）では、ほとんどの項目が10%以下であるが、Q 8が17%の注目すべき高い評価値となっている。教員側のデーターからは、それなりの満足度が読み取れるが、それに相反する結果であり詳細な分析が必要である。多くの学生は授業に興味・関心をもって授業に臨んでいるが、一方、その域に達しない学生の存在が推測され、個を大切に授業の運営に意を用いなければならないと考える。昨年度の2年次生は、Q 8は0%であったことを考えると、客観的、多面的な検討が必要である。幸いにも、Q 1～6から、学習内容や教員の指導姿勢等は学生に伝わり、是認されていると思われるので、私語を慎む・遅刻欠席をしない等、自己を律する能力の育成に努め、より魅力的で分かりやすい授業創造を追求し、建学の精神の具現化に向けた組織的な取り組みを期待したい。

表8-2 ライフデザイン総合学科2年（後期）

	とても そう 思う	だいたい そう 思う	言えない どちら とも	あまり そう 思わない	まったく そう 思わない	無 回 答
Q 1 この授業はわかりやすかった	55%	24%	12%	4%	3%	1%
Q 2 学習内容に興味や関心を持てた	56%	28%	8%	5%	1%	1%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	55%	27%	13%	2%	2%	1%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	57%	25%	10%	5%	3%	1%
Q 5 教員は熱心に教えていた	63%	22%	10%	3%	1%	1%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	63%	26%	8%	1%	1%	1%
Q 7 いつも集中して聴けた	51%	29%	12%	6%	1%	1%
Q 8 私語をつつしんだ	49%	20%	14%	11%	6%	1%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	52%	24%	14%	4%	5%	1%
Q 10 意欲的に取り組んだ	58%	25%	12%	4%	2%	0%

3. 食物栄養学科1年

・前期

調査項目10項目の中で、Q 9（遅刻、欠席がないよう心がけた）が、「とてもそう思う」で66%の比較的高い評価を示し、次いで、Q 8（私語を

つつしんだ）が55%となっている。「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価では、Q 9の80%が最高値で、Q 5（教員は熱心に教えていた）75%、Q 8の73%、Q 6（授業中どの学生にも公平に接していた）70%と続いている。

しかし、全体的には、例年に比べて極めて厳しい評価結果である。「とてもそう思う」で30%台が5項目（Q 1・2・3・4・7）も存在し、40%台も3項目（Q 5・6・10）に及んでいる。昨年度は、30%、40%台は皆無であったことを考えると異常な結果である。「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価でも、70%を超えたのは4項目（Q 5・6・8・9）に過ぎず、Q 9の80%が最も高い評価値である。また、例年、60%を下回るのは皆無に近い状況であったが、Q 1（この授業はわかりやすかった）とQ 4（教員の教え方に工夫が感じられた）はいずれも57%の低率となっており、厳しく自己評価しなければならない。

学生側に関する項目から、学生は時間を守り、真面目に授業に取り組もうとしている姿勢が伺えるが、教える教員はその期待に応えてない状況であり、今回の結果を真摯に受け止めなければならない。

このような結果から、否定的評価（あまりそう思わない＋まったくそう思わない）では、すべての項目が10%を超え、Q 1・2・4・7は20%を

表9-1 食物栄養学科1年（前期）

	とても そう 思う	だいたい そう 思う	言えない どちら とも	あまり そう 思わない	まったく そう 思わない	無 回 答
Q 1 この授業はわかりやすかった	36%	21%	18%	8%	17%	1%
Q 2 学習内容に興味や関心を持てた	36%	24%	17%	8%	13%	1%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	37%	24%	19%	8%	11%	2%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	34%	23%	20%	9%	14%	1%
Q 5 教員は熱心に教えていた	48%	27%	12%	6%	7%	1%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	46%	24%	15%	4%	9%	2%
Q 7 いつも集中して聴けた	37%	25%	16%	9%	12%	1%
Q 8 私語をつつしんだ	55%	18%	14%	5%	7%	2%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	66%	14%	9%	4%	5%	1%
Q 10 意欲的に取り組んだ	47%	22%	16%	6%	7%	1%

超る深刻な結果となっている。

学生は、自己実現に向けて入学し、大学の授業に、指導する教員に大いなる期待と夢を抱いてきているが、それに十分に答え切れていないと言わざるを得ない。学生の資質を問う前に、教員は自らを省みて、分かりやすく、興味・関心の持てる授業を、一日も早く創り上げなければならない。

・後期

調査項目10項目の中で、「とてもそう思う」に関して見れば、Q 9以外の9項目は前期からわずかながら評価値を上昇させており好ましい傾向である。評価値が50%以上も、前期2項目（Q 8・9）から3項目へと増加し、Q 9の66%、Q 8の57%、Q 5の53%となっている。

肯定的評価（とてもそう思う＋だいたいそう思う）に関しても、70%を超える項目は前期の4項目から5項目（Q 5・6・8・9・10）へとわずかながら増加しており、特に、Q 9が81%、Q 5が80%となっている。

しかし、改善されたとはいえ数値的には決して満足できるものではなく、「とてもそう思う」では、依然として30%台が複数存在し、Q 1、Q 3、Q 7はいずれも38%の低い評価値となっている。前期に引き続き、学生は授業に関してかなりの不満を持っている実態が確認できる。

当然の結果として、否定的評価（あまりそう思わない＋まったくそう思わない）も前期から大幅な改善は見られず、いずれも5%以上の評価値となっている。Q 1の15%、Q 2（学習内容に興味や関心が持てた）とQ 4の13%、Q 3（学習内容の分量は適切であった）の10%はいずれも教員側に関する項目であり、冷静かつ客観的に自己分析しなければならない。教員の授業に対する姿勢は、Q 5とQ 6（授業中どの学生にも公平に接していた）からある程度評価されていると考えられ、そして、Q 8・9・10からは学生も前向きに取り組もうとする姿勢が伺えるので、教員は教材の研究に励み、指導力の向上に努力しなければならない。学生一人ひとりの人格を尊重しつつ、学生集団が持つパワーを大切にしながら、活力のある授業が一層推進されることを期待したい。

表9-2 食物栄養学科1年（後期）

	とても そう 思う	だいたい そう 思う	どちら も 言えない	あまり そう 思わない	まったく そう 思わない	無 回 答
Q 1 この授業はわかりやすかった	38%	29%	17%	8%	7%	1%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	40%	27%	19%	6%	7%	0%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	38%	30%	20%	4%	6%	2%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	40%	27%	19%	6%	7%	1%
Q 5 教員は熱心に教えていた	53%	27%	12%	2%	4%	1%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	48%	30%	14%	2%	4%	1%
Q 7 いつも集中して聴けた	38%	31%	21%	4%	4%	2%
Q 8 私語をつつしんだ	57%	19%	16%	3%	3%	2%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	66%	15%	12%	5%	1%	1%
Q10 意欲的に取り組んだ	49%	25%	21%	3%	2%	0%

4. 食物栄養学科2年

・前期

調査項目10項目の中で、「とてもそう思う」に関して、Q 9（遅刻、欠席がないよう心がけた）が77%の高率を示し、Q 5（教員は熱心に教えていた）とQ 8（私語をつつしんだ）が67%、Q 10（意欲的に取り組んだ）が65%、Q 6（授業中どの学生にも公平に接していた）が64%となっている。

「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価でも、Q 1（この授業はわかりやすかった）の78%以外はすべての項目が80%を超えており、特に、Q 9は92%、Q 5・8は89%、Q10は88%の極めて高い評価値となっている。1年次の後期にもほぼ同じような結果が出ており、2年次に進級しても維持継続されていることは喜ばしいことである。

否定的評価（あまりそう思わない＋まったくそう思わない）について、Q 9は2%をはじめ、全体的には好ましい状況がみられるが、10%弱の項目が教員側の項目にいくつか見られることに着目すべきであろう。Q 1とQ 2（学習内容に興味や関心が持てた）9%、Q 4（教員の教え方に工夫が感じられた）8%については、見過ごすことなく速やかに検討を加えることが必要である。2年次生になり、専門科目が大幅に増加して、それも馴染み難い理系的科目が増えれば、難易度も上が

り、理解もなかなか進まず、興味、関心も減退することもある。しかし、教員はそれらを克服して学力の維持伸長に努めなければならない責務がある。学生の実態を的確に捉え、実態に即した創意工夫された授業を構築し、目標水準の達成に努めなければならない。

学生も、興味、関心が沸かないのはわかり難い授業等が原因なのか、それとも、授業に臨む準備や心構え等自分自身の責に属するのか冷静かつ客観的な検討を加え、改善の努力を怠ってはならない。

表10-1 食物栄養学科2年(前期)

	とても 思う	そうだ い たい	言 え ない	ど ち ら も	あ ま り な い	思 わ な い	ま っ た く そ う	無 回 答
Q 1 この授業はわかりやすかった	54%	24%	11%	5%	4%	1%		
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	58%	23%	10%	5%	4%	1%		
Q 3 学習内容の分量は適切だった	55%	25%	12%	4%	3%	1%		
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	58%	22%	11%	4%	4%	1%		
Q 5 教員は熱心に教えていた	67%	22%	6%	2%	2%	1%		
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	64%	21%	8%	2%	3%	1%		
Q 7 いつも集中して聴けた	58%	28%	7%	4%	2%	1%		
Q 8 私語をつつしんだ	67%	22%	5%	3%	2%	1%		
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	77%	15%	5%	1%	1%	1%		
Q 10 意欲的に取り組んだ	65%	23%	7%	2%	2%	1%		

・後期

調査項目10項目の中で、「とても思う」に關して、Q 9が前期に引き続いて76%の高水準を維持し、Q 5(教員は熱心に教えていた)が69%、Q 8が67%、Q 10が66%、Q 6が65%の高率で続いている。

「だいたい思う」を含めた肯定的評価では、Q 9が95%、Q 10が91%、Q 8が90%と極めて高い評価値であり、残りの7項目もすべて80%を超える好ましい結果である。加えて、殆どの項目が前期より評価値を上昇させていることも喜ばしいことである。教員の授業に対する姿勢や日々工夫された授業運営、時機を得た指導・助言等々に学生は誠実に応え、遅刻や欠席をせず、真面目に授

業を受けようと努力している姿が伺える。

そして、否定的評価では、大半の項目が5%を割る結果であり、Q 1とQ 4のみが5%である。前期に比して、いずれも改善された姿であり、指導する教員の姿勢と学生の学ぶ意欲がうまく絡み合っている証であろう。教員は、この結果に甘んじることなく、時代や社会の変化を的確に把握しつつ、それに合った知識・情報を正しく学生に伝えなければならない。授業の内容や構成を精査し、教材・教具の工夫、教授方法の改善等に努め、魅力ある授業の創造に向けて一層の努力を重ねることが教員の責務である。学生自身も冷静に自己評価し、常に向上心を持ち続け、努力を重ねなければならない。学力とは、知識技能を習得した学習到達度(学んだ力)だけでなく、学び方(学ぶ力)と学ぶ意欲(学ぼうとする力)とを含んだ総合的な力量であることを今一度確認して欲しい。

表10-2 食物栄養学科2年(後期)

	とても 思う	そうだ い たい	言 え ない	ど ち ら も	あ ま り な い	思 わ な い	ま っ た く そ う	無 回 答
Q 1 この授業はわかりやすかった	59%	25%	10%	3%	2%	1%		
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	63%	23%	11%	2%	1%	1%		
Q 3 学習内容の分量は適切だった	61%	24%	10%	3%	1%	1%		
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	64%	22%	9%	3%	2%	0%		
Q 5 教員は熱心に教えていた	69%	20%	7%	1%	1%	1%		
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	65%	24%	6%	2%	2%	1%		
Q 7 いつも集中して聴けた	63%	24%	9%	1%	1%	1%		
Q 8 私語をつつしんだ	67%	23%	5%	2%	1%	1%		
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	76%	19%	3%	2%	0%	0%		
Q 10 意欲的に取り組んだ	66%	25%	5%	1%	1%	1%		

5. 幼児教育学科1年

・前期

調査項目10項目の中で、Q 9(遅刻、欠席がないよう心がけた)では70%という高い評価値になっており、続いて、Q 5(教員は熱心に教えていた)が69%、Q 6(授業中どの学生にも公平に接していた)が66%となっている。50%を下回ったのは、Q 1(この授業はわかりやすかった)とQ

3（学習内容の分量は適切であった）の49%、Q7（いつも集中して聴けた）の47%の3項目とやや不満を感じるが、学生が冷静に自己評価したものと考えたい。

「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価でも、すべての項目が70%台後半の評価値であり、Q5は91%、Q3は86%、Q6とQ9は85%の高評価となっている。これらは、いずれも教員及び学生側双方に関する項目であり、相互の信頼関係が確実に確保されている証であろう。昨年同期もほぼ同様の結果が見られており、学科の良き伝統は守られていると推察する。

否定的評価（あまりそう思わない＋まったくそう思わない）について、Q5の2%をはじめ低率を示す項目が殆どで好ましい姿である。その中で、Q1・Q3・Q8（私語をつつしんだ）の8%、Q7の7%は見逃してはならない。極一部の学生ではあるが、授業の内容が理解できず、授業に集中できなくて授業外のことに興味、関心が向いてしまい、苦しんでいる学生の存在が推測される。一人ひとりを的確に把握して、個を大切にした指導を心がけ、自己実現が成し遂げられる力の育成に組織を挙げて更なる努力することを期待したい。そして、「どちらとも言えない」が、他学科に比べるとやや高い数値になっているのも本学科の特色であり、注目したいところである。

・後期

調査項目10項目の中で、「とてもそう思う」で70%以上の項目が、前期の1項目からゼロへと後退しているが、3項目も存在した40%台は逆にゼロへと改善されている。評価値を大幅に上昇させた（10ポイント以上）5項目（Q1・2・3・7・8）を含め7項目が前期より高い評価値を出している。特に高い項目は、Q5とQ9の67%、Q6とQ10（意欲的に取り組んだ）の66%、Q7の65%である。

この結果、「だいたそう思う」を含めた肯定的評価では、すべての項目が80%以上であり、特に、Q5・6・7・10の88%をはじめ、残りの項目も80%台の後半となる大変すばらしい評価値となっている。前期から著しく成長した証と捉えたい。昨年同期では、80%台は4項目だけであったことと対比しても、賞賛に値するものである。

当然のこととして、否定的評価では10項目のすべてが5%未満となっている。指導する教員の熱意ある姿勢を学生が真正面から受け止め、相互の信頼関係が確立されていることの証である。加えて、学生は、体験型授業の多い学科の特性から多くの感動を味わい、感動することで更なる意欲が沸き、能動的に学生生活をすごし、授業を楽しんでいるものと思われる。昨年、一昨年は、学生生活に慣れた結果なのか、前期から後期にかけて評

表11-1 幼児教育学科1年（前期）

	とても そう 思う	だ い た い そ う 思 う	言 え な い	ど ち ら と も	あ ま り そ う 思 わ な い	ま た た く そ う 思 わ な い	無 回 答
Q 1 この授業はわかりやすかった	49%	29%	13%	6%	2%	1%	
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	51%	27%	15%	4%	1%	1%	
Q 3 学習内容の分量は適切だった	49%	27%	16%	5%	3%	1%	
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	54%	30%	10%	4%	1%	1%	
Q 5 教員は熱心に教えていた	69%	22%	6%	1%	1%	1%	
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	66%	19%	10%	2%	1%	2%	
Q 7 いつも集中して聴けた	47%	24%	19%	6%	1%	3%	
Q 8 私語をつつしんだ	52%	26%	12%	5%	3%	2%	
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	70%	15%	9%	3%	2%	0%	
Q 10 意欲的に取り組んだ	58%	24%	15%	3%	1%	1%	

表11-2 幼児教育学科1年（後期）

		とても そう 思う	だ い た い そ う 思 う	言 え な い	ど ち ら か も	あ ま り そ う 思 わ な い	ま た た く そ う 思 わ な い	無 回 答
Q 1	この授業はわかりやすかった	63%	23%	9%	3%	1%	1%	
Q 2	学習内容に興味や関心が持てた	62%	24%	9%	3%	1%	1%	
Q 3	学習内容の分量は適切だった	59%	26%	10%	2%	1%	1%	
Q 4	教員の教え方に工夫が感じられた	61%	25%	9%	3%	1%	1%	
Q 5	教員は熱心に教えていた	67%	21%	7%	2%	1%	2%	
Q 6	授業中どの学生にも公平に接していた	66%	22%	7%	2%	0%	2%	
Q 7	いつも集中して聴けた	65%	23%	8%	2%	0%	2%	
Q 8	私語をつつしんだ	64%	23%	9%	2%	0%	2%	
Q 9	遅刻、欠席がないよう心がけた	67%	19%	9%	3%	1%	1%	
Q10	意欲的に取り組んだ	66%	22%	8%	2%	0%	1%	

価値が低下したことを考えると、今年度の学生には大きな期待ができるだろう。

6. 幼児教育学科2年

・前期

調査項目10項目の中で、「とてもそう思う」に関して70%の大半は存在しないが、Q5（教員は熱心に教えていた）が67%、Q9（遅刻、欠席がないよう心がけた）が66%、Q6（授業中どの学生にも公平に接していた）が64%、Q4（教員の教え方に工夫が感じられた）が62%、Q10（意欲的に取り組んだ）が61%となっている。残りの5項目もすべてが50%以上の好ましい結果である。

「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価では、10項目すべてが80%以上の大変高い評価値となっている。特に高い項目は、Q5とQ10の90%、Q6とQ9の89%、Q3（学習内容の分量は適切だった）とQ4の87%で、賞賛に値する。

このような結果から、否定的評価（あまりそう思わない+まったくそう思わない）では、すべての項目が5%以下で、Q1（この授業はわかりやすかった）の5%が最も高い数値である。以下、Q2（授業内容に興味や関心が持てた）・Q4・Q7（いつも集中して聴けた）・Q8（私語をつつしんだ）が3%となっており、好ましい師弟環境の下で満足度の高い授業が維持されているものと

思われる。

1年次の同期では、肯定的評価80%以上は5項目（Q2・5・6・9・10）、否定的評価について5%以上が6項目（Q1・2・3・4・7・8）あったことを考えると長足の進歩であり、他学科の範ともなるものである。

・後期

改善の必要性が少なかった前期の評価結果は、後期にも継続されたばかりでなく、一段と評価を高めている。「とてもそう思う」では、Q5とQ10が78%、Q6が76%、Q2（学習内容に興味や関心が持てた）とQ4が75%であり、特筆すべき好結果である。加えて、Q9以外は、10ポイント以上的大幅アップが見られていることも賞賛される。低い評価項目でも、Q8の67%、Q7の69%であり、他学科の追隨を許さないハイレベルの結果である。

肯定的評価（とてもそう思う+だいたそう思う）も、全項目が80%を超え、90%台も前期2項目（Q5・10）から7項目へと著しく増加している。Q2とQ10が93%、Q3とQ5が92%、Q1とQ4が91%、Q6が90%であり、教員側に関する項目のすべてが含まれており、授業内容をはじめ教員の指導姿勢は好意的に受け止められ、極めて良好な環境の中で授業が運営されていると思われる。

表12-1 幼児教育学科2年（前期）

	とても そう 思う	そう だいた い そう 思う	言え ない ど ち ら か も	思 わ な い あ ま り そ う	思 わ な い ま っ た く そ う	無 回 答
Q1 この授業はわかりやすかった	56%	28%	10%	4%	1%	1%
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	58%	28%	10%	2%	1%	1%
Q3 学習内容の分量は適切だった	57%	30%	10%	2%	0%	2%
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	62%	25%	9%	3%	0%	2%
Q5 教員は熱心に教えていた	67%	23%	6%	1%	0%	2%
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	64%	25%	8%	1%	1%	1%
Q7 いつも集中して聴けた	52%	32%	11%	2%	1%	2%
Q8 私語をつつしんだ	55%	29%	10%	2%	1%	2%
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	66%	23%	9%	1%	1%	1%
Q10 意欲的に取り組んだ	61%	29%	8%	2%	0%	0%

表12-2 幼児教育学科2年（後期）

	とても そう 思う	そう だいた い そう 思う	言え ない ど ち ら か も	思 わ な い あ ま り そ う	思 わ な い ま っ た く そ う	無 回 答
Q1 この授業はわかりやすかった	72%	19%	7%	0%	0%	2%
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	75%	18%	6%	0%	0%	1%
Q3 学習内容の分量は適切だった	73%	19%	7%	0%	0%	1%
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	75%	16%	6%	0%	0%	2%
Q5 教員は熱心に教えていた	78%	14%	5%	0%	0%	3%
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	76%	14%	7%	0%	0%	3%
Q7 いつも集中して聴けた	69%	20%	8%	0%	0%	3%
Q8 私語をつつしんだ	67%	20%	9%	0%	0%	4%
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	72%	17%	8%	1%	0%	1%
Q10 意欲的に取り組んだ	78%	15%	5%	1%	0%	1%

る。平素からの組織的かつ継続的な努力、工夫が結実したものであろう。

一方で、否定的評価（あまりそう思わない＋まったくそう思わない）に関しては、当然のごとく前期から一段と数値は減少（好転）しており、Q 9・Q10以外は0%である。（9・10は1%）

このような結果は、昨年度も同様の姿がみられており、本学科の特色とするところである。教員の熱意ある姿勢を学生も真正面から受け止め、相互の信頼関係が確保され、良好な師弟関係が維持・発展されていることを示している証である。

7. 介護福祉学科1年

・前期

調査項目10項目の中で、「とてもそう思う」について、Q 9（遅刻、欠席がないよう心がけた）が92%の驚異的な評価値であり、続いて、Q 5（教員は熱心に教えていた）が82%、Q 8（私語をつつしんだ）79%、Q10（意欲的に取り組んだ）77%等々、他学科では見られない大変高い評価値となっている。残りの項目も60%を下回る項目は一つも存在していない。

肯定的評価（とてもそう思う＋だいたそう思う）でも、評価値の低い項目はQ 3（学習内容の分量は適切であった）の87%、Q 6（授業中どの学生にも公平に接していた）とQ 7（いつも集中して聴けた）の89%で、残りはすべて90%台という驚くべく好結果がみられる。特に、Q 5の95%、Q 9の96%から、授業に対する教員の熱心な姿勢に学生は極めて高い評価を与え、学生も時間を守って授業に出席しようと努力していることが推察される。教員の情熱と学生の意欲が、うまくかみあった好ましい状況の下で授業が進められている証である。

否定的評価（あまりそう思わない＋まったくそう思わない）からは、大きな評価値でも、Q 1（この授業はわかりやすかった）の4%であり、特段問題は存在しないと考えられる。「一人一人を大切に、一人の脱落者も出さない」きめ細かく、懇切丁寧な指導をウリにする本学の教育を考えると、更なる取り組みの強化を図り、この状況が維持発展されることを期待したい。

表13-1 介護福祉学科1年（前期）

	とても そう 思う	だいた そう 思う	言え ない ど ち ら と も	思 わ な い あ ま り そ う	ま っ た く そ う 思 わ な い	無 回 答
Q 1 この授業はわかりやすかった	67%	23%	6%	3%	1%	1%
Q 2 学習内容に興味や関心を持てた	70%	22%	6%	1%	1%	0%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	60%	27%	9%	1%	2%	1%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	72%	19%	5%	2%	1%	1%
Q 5 教員は熱心に教えていた	82%	13%	2%	1%	1%	1%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	73%	16%	6%	2%	1%	1%
Q 7 いつも集中して聴けた	68%	21%	7%	1%	2%	1%
Q 8 私語をつつしんだ	79%	12%	6%	1%	1%	1%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	92%	4%	2%	1%	1%	1%
Q10 意欲的に取り組んだ	77%	16%	3%	2%	1%	1%

・後期

調査項目10項目の中で、「とてもそう思う」に関して、Q 9が83%で、前期に引き続き一番高い水準が維持されている。これに続くのがQ 5の82%とQ10の80%である。前期より評価値を上昇させたのは6項目（Q 1・2・3・4・7・10）に及び、10ポイント以上の大幅上昇が見られたのはQ 1とQ 3である。低下した項目もあるが、すべての項目が70%以上の大変すばらしい結果である。

「だいたそう思う」を含めた肯定的評価でも、すべてが90%以上の驚異的な結果である。昨年度でも70%以上の好結果が出ていたが、それをはるかに上回る結果であり喜ばしい限りである。分け隔てなく、熱心に教える教員の姿勢に魅力を感じ、それに応えるべく遅刻や欠席をせず、意欲をもって授業に臨もうとする学生の真摯な姿が推察される。

否定的評価（あまりそう思わない＋まったくそう思わない）でも、当然のことながらすべての項目が1～3%で、他の学科の範となる姿である。しかし、昨年度までの結果とはかなり相違した結果であることを考える時、数字では見えないところにも目配り、気配りをして、学生や保護者、ひいては地域社会の期待に応え得る授業創造に向けて努力を怠ってはならない。

表13-2 介護福祉学科1年(後期)

	とても 思う	そう 思う	だいた い思う	言え ない	どちら とも	思わ ない	あま り思 う	まっ たく 思わ ない	無回 答
Q1 この授業はわかりやすかった	77%	15%	6%	0%	1%	1%			
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	75%	16%	5%	0%	1%	2%			
Q3 学習内容の分量は適切だった	72%	18%	6%	1%	2%	1%			
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	78%	14%	5%	1%	1%	2%			
Q5 教員は熱心に教えていた	82%	10%	4%	0%	1%	3%			
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	77%	13%	4%	0%	1%	3%			
Q7 いつも集中して聴けた	74%	17%	6%	0%	1%	2%			
Q8 私語をつつしんだ	76%	14%	7%	0%	1%	2%			
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	83%	9%	4%	0%	1%	3%			
Q10 意欲的に取り組んだ	80%	13%	5%	0%	1%	0%			

8. 介護福祉学科2年

・前期

調査項目10項目の中で、「とても思う」では、Q9(遅刻、欠席がないよう心がけた)が72%、Q5(教員は熱心に教えていた)が65%、Q8(私語をつつしんだ)が60%の高い評価となっている。反面、50%を下回ったのが4項目(Q1・2・3・7)に及び、1年生とは大きく異なる結果となっているのは気がかりである。

「だいたい思う」を含めた肯定的評価になると、80%以上が5項目(Q4・5・8・9・10)、70%台も残りの5項目で、好ましい状況であるといえる。特に高かった項目は、Q5とQ9の85%である。教員の授業に臨む姿勢に好感を持ち、それに応えるべく遅刻・欠席がないように努力している姿が確認されるとともに、教員と学生間の信頼関係の下、充実した授業が維持されていることが伺える。

しかし、否定的評価(あまりそう思わない+まったくそう思わない)に関しては、Q1(この授業がわかりやすかった)が9%、Q2(学習内容に興味や関心が持てた)が8%、Q3(学習内容の分量は適切だった)が7%で、いずれも教員側に関する項目で、やや厳しい結果が出ている。極一部ではあろうが、授業が理解できず、興味がわかないで苦労している学生の存在が推測される。

学生の実態を的確に把握し、個応じた授業運営に組織力を活かして対応し、学生一人ひとりの自己実現が成し遂げられるよう更なる工夫努力を期待したい。

表14-1 介護福祉学科2年(前期)

	とても 思う	そう 思う	だいた い思う	言え ない	どちら とも	思わ ない	あま り思 う	まっ たく 思わ ない	無回 答
Q1 この授業はわかりやすかった	49%	27%	15%	6%	3%	1%			
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	47%	31%	14%	5%	3%	0%			
Q3 学習内容の分量は適切だった	48%	28%	16%	5%	2%	1%			
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	54%	26%	13%	3%	2%	1%			
Q5 教員は熱心に教えていた	65%	20%	10%	2%	1%	2%			
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	58%	21%	13%	3%	2%	3%			
Q7 いつも集中して聴けた	47%	28%	17%	5%	2%	1%			
Q8 私語をつつしんだ	60%	20%	12%	4%	1%	2%			
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	72%	13%	10%	1%	1%	2%			
Q10 意欲的に取り組んだ	56%	24%	15%	3%	1%	0%			

・後期

調査項目10項目の中で、「とても思う」では、前期において、50%を下回った4項目は、改善されて50%台となっている。そして、6項目(Q1・2・3・4・7・10)は評価値を上昇させ、低下させたのは2項目(Q5・6)のみである。特に高い評価値が見られたのは、Q9の68%、Q5の63%である。

肯定的評価(とても思う+だいた思う)では、80%以上が前期の5項目から1項目(Q9)に減少するなど、全体的に評価値を下降させる厳しい結果となっている。しかし、下降したとはいえ、すべての項目が70%台を維持していることは幸いである。体験型の授業が多い学科の特性が活かされ、教員も授業に創意工夫を凝らし、学生の側に立って、分かりやすい授業運営に努める等、常に授業改善に意を用いた努力の賜であろう。ただ、80%台が4項目(Q4・5・6・9)も存在した1年前に比べると、全体的に評価値は下がっており、多少気になるところではあり、学科内での分析を待ちたい。

否定的評価（あまりそう思わない＋まったくそう思わない）に関しては、Q3が14%、Q2とQ6（授業中どの学生にも公平に接していた）が12%、Q1とQ7（いつも集中して聴けた）が11%、Q4（教員の教え方に工夫が感じられた）とQ5・Q10（意欲的に取り組んだ）が10%と、8項目が10%以上の厳しい評価である。教員側に関する項目がすべて該当しており、教員はこの結果を真摯に受け止め、問題点を正しく把握し、個に応じた指導に叡智を結集しなければならない。

表14-2 介護福祉学科2年（後期）

	とても そう 思う	そう だいたい 思う	どちら とも言 えない	あまり 思わ ない	ま た く そ う 思 わ な い	無 回 答
Q1 この授業はわかりやすかった	54%	17%	16%	3%	8%	3%
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	55%	15%	17%	4%	8%	1%
Q3 学習内容の分量は適切だった	53%	17%	15%	6%	8%	1%
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	56%	18%	15%	3%	7%	1%
Q5 教員は熱心に教えていた	63%	15%	12%	3%	7%	1%
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	57%	17%	12%	5%	7%	2%
Q7 いつも集中して聴けた	55%	16%	16%	4%	7%	2%
Q8 私語をつつしんだ	60%	14%	16%	3%	5%	2%
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	68%	14%	11%	2%	4%	1%
Q10 意欲的に取り組んだ	60%	17%	13%	3%	7%	0%

9. 留学生1年

・前期

言葉に不安を抱きつつ、夢を追い、学習意欲に燃えてスタートした日本での大学生活だが、かなり満足度の高い学生生活を過ごしているようである。「とてもそう思う」に限定しても、すべての項目が90%以上で、「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価になると、95～100%である。不自由な会話環境の中ででありながら、教員と学生の意思疎通が十二分に出来て、厚い信頼関係の下で授業がなされている証であろう。当然のこととして、否定的評価は極めて小さい値となっている。

ほとんどの留学生が満足していると考えられるが、文化や価値観等々が大きく異なるので、ミスマッチも生じやすいことに思いを馳せ、日本人学

生に対する以上に一人ひとりの留学生理解に注意を払わなければならない。留学生の期待に応える、内容の充実した授業を維持するため更なる創意工夫を重ね、日中友好の絆を強めるためにも、全学挙げて努力しなければならない。

表15-1 留学生1年（前期）

	とても そう 思う	そう だいたい 思う	どちら とも言 えない	あまり 思わ ない	ま た く そ う 思 わ な い	無 回 答
Q1 この授業はわかりやすかった	95%	0%	1%	0%	4%	0%
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	100%	0%	0%	0%	0%	0%
Q3 学習内容の分量は適切だった	98%	0%	2%	0%	0%	0%
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	100%	0%	0%	0%	0%	0%
Q5 教員は熱心に教えていた	99%	0%	0%	0%	0%	1%
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	99%	0%	0%	0%	0%	1%
Q7 いつも集中して聴けた	99%	0%	1%	0%	0%	1%
Q8 私語をつつしんだ	99%	1%	0%	0%	0%	0%
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	99%	1%	0%	0%	0%	1%
Q10 意欲的に取り組んだ	99%	0%	0%	0%	0%	1%

・後期

後期も、前期同様に高い評価が見られ、すべての項目で「とてもそう思う」が91～99%となっている。数値を見る限りにおいては、問題点はないものと思われる。

日本での生活にも馴染み、落ち着いて学習に専念できるようになり、その結果、学習に対する熱い思いが一段と高まったものと思われる。そして、熱意ある教員の姿勢が留学生にも浸透し、留学生もそれに応じて意欲的に授業に出席し、理想的な授業が行われていると思われる。進度が進むに従って、学力差の拡大等様々な課題も発生するかもしれないが、今回のような評価が今後も保持されることを期待したい。

表15-2 留学生1年(後期)

	とても 思う	だいた い思う	言えな い	どちら とも	思わな い	あま りそう 思わな い	ま ったく そう 思わな い	無 回 答
Q 1 この授業はわかりやすかった	96%	1%	0%	1%	2%	1%		
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	96%	0%	2%	1%	0%	1%		
Q 3 学習内容の分量は適切だった	96%	1%	0%	1%	1%	1%		
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	97%	2%	0%	1%	0%	0%		
Q 5 教員は熱心に教えていた	96%	1%	1%	1%	0%	1%		
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	98%	0%	1%	0%	1%	1%		
Q 7 いつも集中して聴けた	99%	1%	1%	0%	0%	0%		
Q 8 私語をつつしんだ	91%	0%	1%	0%	8%	1%		
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	98%	1%	0%	0%	0%	1%		
Q 10 意欲的に取り組んだ	98%	1%	0%	1%	0%	1%		

10. 留学生2年

・前期

1年次生同様に、極めて高い評価となっている。「とても思う」に関して、すべての項目が97~99%となっており、大変好ましい結果である。教員の熱心な指導や創意工夫された授業に心が揺さぶられ、日本語試験や他大学への進学等目的意識も明確になり、意欲的で充実した学生生活

表16-1 留学生2年(前期)

	とても 思う	だいた い思う	言えな い	どちら とも	思わな い	あま りそう 思わな い	ま ったく そう 思わな い	無 回 答
Q 1 この授業はわかりやすかった	99%	1%	0%	0%	0%	0%		
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	99%	1%	0%	0%	0%	0%		
Q 3 学習内容の分量は適切だった	98%	1%	0%	0%	0%	0%		
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	98%	1%	0%	0%	0%	1%		
Q 5 教員は熱心に教えていた	99%	1%	0%	0%	0%	0%		
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	98%	1%	0%	0%	0%	0%		
Q 7 いつも集中して聴けた	98%	1%	0%	0%	0%	1%		
Q 8 私語をつつしんだ	97%	2%	0%	0%	0%	1%		
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	97%	2%	1%	0%	0%	0%		
Q 10 意欲的に取り組んだ	97%	2%	0%	0%	0%	0%		

を送っている現れであろう。今後も、このような大変好ましい状況が継続されることを期待したい。

・後期

前期の高い評価は、後期では更に上昇している。「とても思う」に関して、100%が5項目、99%が5項目で数字的には何ら問題は存在していないと思われる。教員は、分かりやすく、創意工夫された授業の創造と熱心な指導に意を尽くし、学生もそれに応えて自らの姿勢を律し、真剣に授業を受けている様子が伺える。留学生一人ひとりの夢が実現することを祈念する。

表16-2 留学生2年(後期)

	とても 思う	だいた い思う	言えな い	どちら とも	思わな い	あま りそう 思わな い	ま ったく そう 思わな い	無 回 答
Q 1 この授業はわかりやすかった	99%	0%	0%	0%	0%	0%		
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	99%	0%	0%	0%	0%	0%		
Q 3 学習内容の分量は適切だった	99%	0%	0%	0%	0%	0%		
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	100%	0%	0%	0%	0%	0%		
Q 5 教員は熱心に教えていた	100%	0%	0%	0%	0%	0%		
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	99%	0%	0%	0%	0%	1%		
Q 7 いつも集中して聴けた	100%	0%	0%	0%	0%	0%		
Q 8 私語をつつしんだ	99%	0%	0%	0%	0%	0%		
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	100%	0%	0%	0%	0%	0%		
Q 10 意欲的に取り組んだ	100%	0%	0%	0%	0%	0%		

おわりに

本学の建学の精神である「自立・自活できる人材の育成」を達成するためには、教員の資質能力の向上は不可欠である。大学は、学術研究の中心として深く真理を探究し、専門の学芸を教授研究することを本質とするものであり、そのため従来は、研究活動に重心が置かれていた。しかし、少子化が進行し、大学全入時代を迎えた今日、学生の自己実現を図る「教育」の重要性が叫ばれるようになってきた。そして、学生の学力低下については全国的な問題となっており、入学前の補習授業を行う大学も増加傾向にある。

教員が授業内容・方法の改善に叡智を絞り、指導力を向上させる組織的な取り組み（FD）が強調されはじめたのも最近のことである。個人の努力を求めつつ、組織的、継続的な努力が期待されている。

本学で、学生による授業評価を導入して11年が経過した。教員は授業に関するPDCAを理解し、真摯な態度で反省、分析、対策を立て、実践し、着実にその成果を挙げてきている。特に、Q5（教員は熱心に教えていた）の項目については、毎年、前・後期とも最上位の肯定的評価となっており、その他の教員側に関係する項目もほとんどが高い評価を得ている。使命感に溢れ、強い教育的愛情をもったきめ細かい指導は殆どの学生に好意的に受け止められている証である。

今年度も、アンケート結果からは、例年並みのかなり高い水準の授業評価がみられ、学生も、大部分が教員の指導姿勢や授業に満足していることが推測される。教員にとって、高い評価からは「やる気」が醸成され、より高い次元での授業の創造へと希望も膨らむ。

一方、厳しい評価には少なからずショックを受ける。しかし、冷静に自己評価して改善の道を模索し、学生の期待に応え得る資質能力を身に付けなければならぬことはいうまでもない。授業公開等FD研修の積極的な活動を推し進めることも、問題点の解決の一方策である。今回のアンケート結果が、明日の明るい途となることを期待する。